

授業科目名・形態	助産学実習Ⅰ	実習	必修・選択の別	選択	単位数	5
科目担当者氏名	工藤 優子・岩間 薫・関口 麗子		実務経験の有無	有	開講期	4年前期

【授業の主題】

妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象の身体的・心理的・社会的側面・地域・家族から多面的に情報収集し、統合した助産過程の展開を行い、立案した計画に沿って安全で安楽な分娩介助およびケアを実践する。さらに提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次の介助とケアに活かす学びを深める。

また、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割を理解し、看護者としての必要な倫理的義務や責任について学ぶ。

【到達目標】

1. 妊産褥婦・新生児について、身体的・心理的・社会的側面・地域・家族から多面的に情報収集し、統合した助産過程の実践ができる。
2. 助産診断に基づいた計画を立案し、分娩介助およびケアを実践できる。
3. 継続事例の受け持ちを通して、妊娠期から産褥・新生児期まで継続した個別的なケアを提供できる。
4. 提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次のケア提供に活かすことができる。
5. 専門職としての役割・責務を認識した行動を学ぶ。

【授業計画・内容】

1. 産婦を受け持ち、助産過程の展開を行い正常分娩の介助を10例程度実践する。(継続受け持ち事例を含む)
 2. 継続事例として、妊娠期から分娩・産褥・新生児期までの受け持ちを1例実施する。
 - 1) 妊産婦を分娩第1期から受け持ち、入院時・分娩各期の観察および分娩介助を含むケア・新生児の健康診査、退院時まで母児のケアを行う。
 - 2) 受け持ちの産婦が異常に移行した場合は、実習指導者の指示に従い直接的なケアについて見学を通して学ぶ。
 - 3) 実習内容は実習指導者と相談の上で決定し、実習計画の発表・調整・報告を行いながら、主体的にのぞむ。
 - 4) 評価表を用いて、各段階における到達目標の評価を行い、自己の課題と目標を明確にする。
- *その他の計画・内容の詳細は、別途実習要項を参照のこと。

【授業実施方法】 臨地実習

【授業準備】

事前にこれまでの学習内容、および教科書・資料・参考文献を復習し、分娩介助技術をマスターしておくこと。

【主な関連する科目】

助産学概論、基礎助産学、助産診断・技術学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、助産管理論

【教科書等】

助産学講座1 助産学概論～助産学講座8 医学書院、授業で配布した資料など。

【参考文献】

日本助産診断・実践研究会：実践 マタニティ診断第4版 医学書院
北川真理子、内山和美編：今日の助産改訂第3版 南江堂
武谷雄二他監修：プリンシプル産婦人科学2 産科編第3版 MEDICAL VIEW
日本産婦人科学会/日本産婦人科医会編集・監修：産婦人科診療ガイドライン 産科編2017 日本産婦人科学会
その他は、適宜提示する。

【成績評価方法】

事前学習10%、実習評価40%、実習記録40%、実習への取り組み姿勢等10%とし総合的に評価する。

【実務経験及び実務を活かした授業内容】

特定機能病院において助産師として勤務しハイリスクの妊産褥婦、新生児のケアを行ってきた。臨床での根拠のある看護実践の大切さを伝えたいと思う。

【学生へのメッセージ】

これまで学内で学習した全ての知識・技術を活用して臨地実習で実践する大切な実習です。24時間体制の実習になりますから、知識のほか自己の体調管理に留意し、体力・気力の維持を図りましょう。